

特 別 寄 稿

シュメール都市国家と「国土」の 人口について

中原 与茂九郎

はじめに

筆者はさきに「シュメール土地制度について——初期王朝期時代まで——」において、メソポタミア文明の創成期における都市国家ラガシュ、ウンマ、ウル、シュルッパーク等の土地所有問題について管見を述べるところがあった¹⁾。そのうち「(田)氏族共同体とその所有地の問題」²⁾において、ラガシュ都市国家の領土の広さと人口数とに関して、二、三の資料にもとづき、大胆なスペキュレーションを行なって新説を提出した。その際筆者がとり上げた資料に関する資料批判を書き落したので、まずそれを行い、その他人口問題などの事項をも加筆して前論文の補遺の一つとしたい。

(1) TSS³⁾ Nos. 242, 245, 671 文書の性質

筆者が前掲論文の(田)に使用した資料のうち問題となるのは、ファラ(Fara)出土の文書中 R. Jestin の手写になる 242, 245, 671 の3箇の粘土板文書の性質である。これらの文書はいわゆる『教科書』(Schultexte)に属する性質の文書ではなかろうかとの疑問である。というのは、ファラ文書中に多数の教科書的性質をもつ文書が存在していたことは現在衆知のことであり、これに関してはすでに早く1923年にダイメル教授によって、『ファラの教科書』の題名で178箇の文書がかれの研究序文を付して出版されている⁴⁾からである。

『ファラ教科書』の特徴はクレマー(S. N. Kramer)教授も指摘しておられるように、記録の内容は神名・職名・動物・魚・道具類など、いわば単語や熟語を記録しているのみで、後の時代のものにみられるように文章体で記録しているものは未だファラ時代には存在しなかったのである⁵⁾。したがって筆者が使用した前記3箇のファラ文書

シュメール都市国家と「国土」の人口について

は教科書またはその写しとして書かれたものでなく、フェラ文書の大部分を占めている経済・行政文書に属しているものと考えて差支えないのである。ちなみに、フェラ文書を手写したジュスタン氏もまたこれら3文書を普通の経済・行政文書として取り扱っている。

(2) シュルッパークの人口数

筆者は前掲の拙稿において、ジュスタンの TSŠ 671 文書に記録された「壮者 884, 160 人が 6 sila の še-muš を 1 人あて受取った」の記事内容から、884, 160 人という数字は当時ウルク、アダブ、ニップール、ラガシュ、シュルッパークおよびウンマの間に締結されていたケンギル同盟の加盟諸都市の総人口数であろうと推定した。そして「884, 160 人を 6 同盟都市の数で割って見ればその平均値は 147, 360 人となる。6 都市人口に大小のあることは当然考えられる。さきに家族構成について述べたところで自由民の 1 家族員を 4 名ないし 5 名と算定した。かりに 4 名として 147, 360 人を割って見れば、その値は 36, 840 人となる。したがってラガシュのウルカギナ王がかれの碑文のうちにラガシュの人口を 36, 000 人と数えた人員は、1 家の家長 (ab-ba) を指したものと考えることが出来る」と考察した⁹⁾。

しかるにジュスタンの TSŠ 50 文書は TSŠ 671 文書と同じ性質の内容を記録している文書である。この文書を解読すれば次の如くである。

Col. I

- | | |
|---------------------------|------------|
| 1) 1 še-muš ⁷⁾ | シュ・ムシュ (を) |
| 2) sila 7 | 7 シラ (ずつ) |
| 3) aš lú šu-ba-ti | 1 人が受取った。 |
| 4) lú-bi | その人数は |

Col. II

- 1) $36,000 \times 4 + 3,600 \times 5 + 600 \times 4 + 60 \times 2 + 10 \times 5 + 1$ 164, 571 (人)。

TSŠ 671 文書には 884, 160 人が、še-muš と称せられる穀物を、1 人あて 6 シラずつ受取ったと記録されており、この TSŠ 50 文書では 1 人あて 7 シラを受取り、その総人数は 164, 571 人と記録されている。この数字はこの文書が出土した現在のフェラ、すなわちケンギル都市同盟の一員であったシュルッパークの全自由民数を示すものと思考する。『人文』所載の前論文と同様に、1 家族成員の自由民数を 4 人として計算すれ

ば、シュルッパークの家族数は約 41,000 となり、ラガシュの家族数 36,000 に較べれば、前者が後者よりも人口多数の都市国家であったことがわかる。もっともケングル都市同盟時代とウルカギナ王時代との間には、約 200 年の年代距離が存在するのである。

この TSŠ 50 文書の性質はその内容より推察して、『人文』所載論文にとりあげた TSŠ 761 文書と同様に、祭礼日などに全自由民に国王から賜与された特別配与を記録した文書であろうと筆者は理解するのである。

(3) グデア (Gudea) 時代のシュメールの人口について

ラガシュのエンシ、グデアの肖像碑文 B (Col. III 8—11) に、ニンギルス神は「グデアを国土に (kalam-ma) 忠実なる牧者として選び、216,000 人の支配権を与えた」と解せられるべき記録が見える。ラウンド・ナンバーの 216,000 人という数字は、ラガシュを含めてかれの支配する国土すなわちシュメールの地の住民を指すものと考えてよい。

アッカード王朝 (c. 2350—2160 B. C.) が崩壊して、ウル第 3 王朝 (c. 2065—1955 B. C.) が樹立されるまでの約 1 世紀間の大部分は、ザグロス山中の山岳民族グチウム (Gutium, Guti, Gutu) の支配権がシュメールの地に及んでいた。このことは、グチウム王朝を打倒したと伝えられるウルク (Uruk) 国王ウトゥ・ヘガル (Utu-hegal) の一碑文の記事によって知られる。またイシン・ラルサ時代 (c. 1955—1700 B. C.) の末期に編纂された『王朝表』のグチウム王朝の項にも「王権はグチウム蛮族に遷った」と記録され、21 人の王名とその治世年代とが記された後に「蛮族グチウムは武器で打たれ、王権はウルクに遷った。ウルクにおいてウトゥ・ヘガルがその王となった」と記されている。またウンマ (Umma) 出土 (?) の一碑文⁵⁾には「その時イアルラガン (Iār-lagan) はグチウムの王であった。ウンマのエンシ、ナムマフニ (Nammahni) はウンマの母ニンウルラ (⁴Ninurra) 神のためにその古き神殿をその場所に再建した」と記録されている。『王朝表』によれば、イアルラガンはグチウム王朝 19 代王とされている。この碑文が示すように、シュメール諸都市国家はグチウム王朝の宗主権を認めて内政は自治が許されていたことが知られる。

ラガシュのエンシ、グデア (Gudea) の時期についてシュメケル (H. Schmökel) 教授は、ヤコブセン (T. Jacobsen) 教授のシュメール王表の研究 (1939 年) によって、グデアをウルク王ウトゥ・ヘガルより少し前の時期に位置づけられていたが、クレーマ

シュメール都市国家と「国土」の人口について

ー (S. N. Kramer) 教授の発見にかかる (1952年) ウル第3王朝の創立者ウル・ナンムの法典の序文の記事によって今やウル第3王朝時代に変更するべきであると述べられている⁹⁾。法典序文にはウル・ナンムは即位後の政治的行動の第一歩として、ラガシュと戦ってその支配者エンシのナムハニ (Namhani) を殺し、ラガシュによって占領支配されていたかつてのウルの領土を奪回したとの旨が記録されている¹⁰⁾。

他方ラガシュにおいてはグデアの死後、その子ウル・ニンギルス (Ur-^dNingirsu) と孫ウグメ (Ugme) とが相継いでラガシュのエンシとなっている¹¹⁾。さればウル・ナンムによって殺されたナムハニはウグメ以後の支配者と観ねばならない。ウル・ナンムによって武力回復されたウルの一部領土を占領してラガシュの政治的發展をウルクより更に南西方に位するウルの近辺にまで推進させた大君主を、当時のラガシュの諸君主のうちに探索すれば、シュメール・アッカド史上にその全君主中最も大量の碑文を残し、またラガシュに繁栄をもたらした君主グデアの姿がそこにクローズ・アップされるのである。

グデアの残した現存資料からは、初期王朝期のウル・ナンシュやエアンナトゥムやウルカギナがルーガル (王) の称号をとったのと異なって、彼はルーガルの称号を終生とらなかったことが明らかとなる。しかしグデアが事実上敬虔な大君主であったことは、かれの多くの王碑文、殊に肖像碑文Bの記事によって、充分に推知することが出来る。しかし初期王朝時代の諸君主と異なって、グデアは多くの王碑文のうちで、ただ肖像碑文Bのうちに一箇所「武器をもってエラムの都市アンシャン (Anšan) を打ち、その戦利品 (nam-ra-ag) をニンギルス神のためにエ・ニンヌ (神殿) に運んだ」(Col. VI 64—69) との戦争記事を記録しているのみである。また、遠征を予想さす記事としては「かれの愛する王ニンギルス神は上の海から下の海までその道をかれのために開いた」(Col. V 23—27) とあるのが見られるのみで、これは初期王朝時代末期の征服王であった「ウルクの王」にして「国土の王」たりしルーガルザッギシ (Lugalzaggisi) の碑文に記録されたものと同じような表現である。グデアがシュメール外世界の地域から貴重な神殿造営資材としての様々な木材や、肖像彫刻用材としての高価な閃緑岩や金銀銅などの金属類を入手したことも、肖像碑文Bやその他の碑文に記録されているのである。

さて肖像碑文Bによれば、ニンギルス神は「グデアを忠実な牧者として国土に (kalam-ma) 選び、216,000 人のうちにかれの手をつかみ上げた」(Col. III 8—11) と記録されている。この句は上述したように、ニンギルス神によってグデアがシュメールの諸君主のうちから選び出されて 216,000 人の人々が住んでいる国土すなわちシュメール

ルの忠実なる牧者としてその支配者となった、という意味に解される。ラガシュの政治的支配がはるか南西方のウルクよりなお南方のウルの近辺にまで達していたという前述のウル・ナムム法典の序文の記事は、上記グデアの肖像碑文Bの記事を間接的に裏付けるものといわねばならない。

円数 216,000 人という数字を肯定的に正面から取り上げられた学者は ディヤコノフ (U. M. Dyakonov) 氏であり、同氏はこの数はラガシュを含めた「国土」に関する数であり、グデアの支配下にあったシュメールの広い地域に居住する人口である¹²⁾と解された。

筆者もまた「国土」(kalam) をグデアの支配下にあったシュメールの地域と解するディヤコノフ氏と同じ見解をもっているが、円数 216,000 人という数字は全人口を指示しているのではなく、『人文』誌所載の拙稿において論じたウルカギナの碑文に記録された 36,000 人という数字と同じ性質のものであり、全家長 (ab-ba) を指示しているものと解したい。しからば 1 家族の構成員を『人文』の前論文の如く 4 名として計算すれば、家族員数は $216,000 \times 4 = 864,000$ 人となり、この円数はウルク、アダブ、ニップール、ラガシュ、シュルツパークおよびウンマの 6 同盟都市国家の総人口 884,160 人という数字に近似の数となる。ケングル都市同盟を初期王朝Ⅱ期の末期かⅢ期の初期頃に指定すれば 2500 B. C. 頃であり、グデア時代を 2100 B. C. 頃とすれば、両者の間に約 4 世紀の年代距離がある。400 年間におけるシュメールの人口増減の動態はこれを知る由もない。しかしこの 400 年間には、アッカド王朝 (c. 2350—2160 B. C.) 時代の初期にさえシュメールの諸都市の反乱の続発、殊に 5 代王シャルガリ・シャルリ以後のいわば暗黒時代、「誰が王であるか」、「誰が王でないか」その区別もつけがたいと『王朝表』にも記録されているような時期があった。またそれに引きつづき、ウルク王ウトゥ・ヘガルの碑文¹³⁾の表現をかれば、「夫から妻を奪い、親から子を奪いさって」シュメールの地に「悪逆非道」をほしいままにしたグチウム蛮族の約 80 年にわたるシュメール支配があった。このような政治的社会的混乱期が介在したことを考慮すれば、約 4 世紀間におけるシュメールの絶対人口数に増加が見られなかったとしても不自然ではなからう。

前述したケングル都市同盟時代の 6 都市国家の人口数とグデアによって支配されていた地域のそれとが近似していることは、重要な意味を蔵するものと考えざるをえない。すなわち、グデアが支配した都市あるいは地域はラガシュ、ウルク、アダブ、ニップール、シュルツパークおよびウンマという、かつてのケングル同盟諸都市を含む地域では

シュメール都市国家と「国土」の人口について

なかろうかという推測である。ケンギル同盟にウルは加入していなかった。ウル・ナンムが抬頭した時、ラガシュとウルとは敵対関係にあった。ウルク第5王朝の国王は、『王朝表』の伝えるところでは、グチウム支配からシュメールを解放したウトゥ・ヘガルただ一人である。シュメケル教授はウトゥ・ヘガルを打倒した者はかれのウルの代官であったウル・ナンムであろうと推測しておられる¹⁴⁾。筆者は、ウトゥ・ヘガルを倒したものはウル・ナンムであるよりもむしろグデアであったであろうと推測したい。なぜならば、ウル・ナンム法典の序文には、かれがウル王となった時ウルの領土の一部はラガシュに占領支配されていたことを記しているからである。ウトゥ・ヘガルの生存中に、その支配下にあったウルの領土をウルクより遠く北東方に位したラガシュの君主が占領してこれを支配することが起こり得たであろうか。

かつてケンギル同盟の加盟都市国家であった6都市は、ウル第3王朝の統一王国時代にも、シュメール地方の重要な都市であった。このことは王碑文や行政文書によって知られる。ホフマン (E. A. Hoffman) 所蔵の一粘土板文書によれば、アダブのエンシ、シュルツパークのエンシ、ラガシュのエンシは、アッカド地方のバビロンのエンシや他の重要都市のエンシとともに、ニップールのエンリル神殿の月例大祭の主祭者としてウル王によって輪番的に任命されていることを知りうるのである¹⁵⁾。

すでに述べた如く、グデアの碑文にはエラムのアンシャンと戦ったと、一箇所に記録しているのみである。しかし戦争行為を碑文のうちに記録していないということは、彼が戦争を行わなかったということにはならない。

シュメールの50名のエンシ¹⁶⁾の覇者となったウンマのエンシ、ルーガルザグギシ (Lugalzaggisi) は「国土の王」の称号をとっている。「わが王」(lugal-mu) ニンギルスとラガシュの最高神ニンギルス神のみに「王」の称号を用いてみずからはつねにラガシュのエンシと称したグデアは、864,000人の居住する「国土に、忠実な牧者として」(sipa-zi-šè kalam-ma) 君臨したのであった。グデアの支配した「国土」とは、具体的にはウルク(現在のワルカ)、ウンマ(ヨッハ)、ラガシュ(テルロ)、シュルツパーク(ファラ)、アダブ(ビスマヤ)、ニップール(ニッフアル)の諸都市国家の領域を包含した地域と思考する。ウル・ナンム法典の序文の記事から推測すれば、グデアは、ウルクのウトゥ・ヘガルを倒した後、さらに南方に進出してウルの近辺までを支配下においたであろうとも推察される。

ラガシュ都市国家が初期王朝末期には Lagaš, Urukuga, Girsu, Nina, Guabba 等の諸地区から成立していたことは今日ではよく知られているし、またシュルツパークの

一地区の名として Urum^{ki} (または Erim^{ki}) がフェラ出土の一不動産売買文書¹⁷⁾ によって推定されるように、各都市国家は、君主の宮殿および最高神殿の所在する中心部のほかに、数地区から成立していたことが推測される。

このように考えてくると、既述の6都市およびその周辺地域を含み、グデアの支配したであろうと推定される地域は、シュメール地方の中心部を占めていたことがわかる。これらの地域にグデア時代 (c. 2100 B. C.) に約86万人が居住していたとすれば、全シュメール¹⁸⁾ の総人口を約100万と概算しても、それは過大な推算ではなかろうと思う。

(4) エンテメナの碑文に記された「3600人」について

ニップール出土の鐘乳石製の水瓶の破片に、ラガシュのエンシ、エンテメナ (Entemena) がこれをエンリル神に奉納した理由を記した碑文が残っている。この碑文には破損箇所が相当あって完全にこれを読むことは出来ない。碑文の翻字翻訳には F. Thureau-Dangin のものがあり¹⁹⁾、また1957年に E. Sollberger 氏が『前サルゴン期のラガシュの王碑文集』²⁰⁾ として手写本を出版されたもののうちに収録されている。以上の両書を参照してこの碑文に記録されている人口の問題を考察してみたい。碑文の人口に関する部分は次のように解読されるであろう。碑文の書き出しはエンリル神にこれを奉納したエンテメナの称号を記し、その後が一部欠損してその次に

I ša-lú-3600-ta/[šú]-ni ba-ta-[dab₅]-ba-a/[gidri?]-mah nam-tar-ra/^dEn-líl-le /Nibru^{ki}-ta/En-te-me-na-ra/ mu-na-an-[sum-ma-a]... II...da-a/a-zal-la ^dEn-líl...

3,600人のうちから彼(エンテメナ)の手をつかみ出し、運命の大いなる〔王笏?〕をエンリル神はニップールからエンテメナに与え、……した〔時に〕エンリル神はあふれる水を……

とある。この碑文の内容から推察されることは、3,600人の支配権をエンテメナに与えた神は、ウルカギナやグデアの場合のようにニンギルス神ではなく、エンリル神だということである。またこの碑文の末尾にゾルベルガー氏の手写本によれば

nam-ti-la-ni-šè/nam-ti/[La]gaš^{ki}-šè/nam-ti/[]/[a-mu-ne-ru]

かれ(エンテメナ)の生命のために、〔ラ〕ガシュの生命のために、〔]の生命のために〔奉納した〕

シュメール都市国家と「国土」の人口について

とある。この破損した部分には、ラガシュ以外の、3,600人と関係ある都市の名が記録されていたものと思われる。またエンテメナによって新しくラガシュの支配下におかれた都市はラガシュと同待遇をうけたことが、この碑文末尾のエンテメナのエンリル神への祈願の語句の表現から推知されるであろう。その某都市が何んという名の都市であったかを、エンテメナの諸碑文のうちに探求するのも興味あることであろう。

エンテメナの円筒形碑文AおよびBは、かれがラガシュとウンマとの間で戦われた数次の戦争を、初期王朝Ⅱ期のキシュ王メシリム (Mesilim) 時代からエンテメナ時代にわたって回顧して記録した戦記碑文である。この碑文のうちに「この時イル (II) はザバラム (Zabalam^{ki}=NINNI-ĒŠ^{ki}) のサングであった。かれはギルス (Girsu^{ki}) からウンマに向かって勢いよく進軍した。イルはウンマのエンシ職 (nam-ensí) をみずからの手で取った」(A, Col. III 28—37 ; B, Col. IV 18—27) とある。「この時」とあるのは、ラガシュ・ウンマ戦争でウンマのエンシ、ウルルンマが敗死した時を指しているのである。エンテメナの支配下にあったイルがそのサングとして統治していたザバラムは、初期王朝末期のラガシュ領内にはない都市名である。イルがウンマのエンシとなった後にかれとエンテメナとの間は不和となり、両国間に戦争が再発した。この戦争の勝敗の行方はどうなったか、エンテメナの碑文にはその結末が明記されていない。このことは戦争の結果がラガシュ側に不利であったことを裏書きしているものと思われる。イルがザバラムのサングであった関係からして、ザバラムがウンマ側についてラガシュから離脱したであろうことは容易に推察される。そして初期王朝末期の行政・経済文書のうちにザバラムの名がラガシュの地区のうちに見出せない理由も理解するに難くない。

エンテメナがニップールのエンリル神殿に奉納品を献上し、また『人文』所載の拙稿 (pp. 25—26) に述べたように、ラガシュにエンリル神のためにエ・アッダ・イムサッグ神殿を建立し、広い土地をこれに与えた政治行動などを勘案すれば、前述の某都市をザバラムにアイデンティファイしても無理ではなかろう。鐘乳石碑文の3,600人という数字は、その都市がザバラムでなくて他の都市であったにせよ、ラガシュ以外の都市の人口に関係する数字であると筆者は考えるのである。ディヤコノフ氏はこの3,600人をラガシュの人口として「おそらく神殿所属員以外の自由家族の家長の数であろう」²¹⁾と推測しておられる。同氏はラガシュの自由民人口を10万²²⁾と計算しておられるが、家長数3,600人と自由民数10万人との間にはあまりにも大きい開きがありすぎるといわねばならない。筆者も3,600人を自由家族の家長を示す数と解釈する点ではディヤコノフ

氏と見解を同じくするが、この家長数はラガシュのものではなく、ラガシュ以外の都市、おそらくはエンテメナの支配下におかれるようになったであろうザバラムの自由家族の家長数を示すものと思考する。

(5) アッカド時代の一碑文に記録されているラガシュの地積について

アッカド時代のラガシュの面積を考察する上に重要な資料となるものは、テルロ（ラガシュ）出土の石柱碑文²⁹⁾である。この石柱の表面は殆んど磨滅して、ただ末尾にラガシュの耕地名 *gán ù-dug-tu* と読みとれる語が残っている程度である。裏面にもまた多くの欠損箇所があるが、残存碑銘のうちに耕地名、面積、人名、職名等が不完全ながら読みとれる。裏面の碑文の末尾に合計面積と、そのうちに所在する主要都市数と主要地区数などが記録されている。この碑文の解読者 Thureau-Dangin の訳にしたがって末尾の記事を読めば次の如くである。

第4欄、(8) 合計 $x+3600\times 5+60+10\times 3+4\frac{2}{3}\text{-bur } 1\frac{1}{4}\text{-iku}$ ($=x+18094\text{ bur } 13\frac{1}{4}\text{ iku}$), (9) 合計 17 の主要都市 (*uru-sag*), (10) 合計 8 の主要地区 (*maš-ga-na-sag*), (11) [欠損] (12) アッカド (*A-ga-dèki*), (13) 王国 (*nam-lugal*), (14) かれが受けとったものから (*šù-ba-ab-ti-a-ta*) (15) [以下欠文]

Thureau-Dangin は欠文を「ラガシュのエンシの支配地として某に与えられた。」と補足し、アッカド王を、疑問的ではあるが 5 代のシャルガリ・シャルリと措定している。また彼は x とした箇所には 5 箇所か 6 箇所の記号が磨滅したあとかたがあると指摘している。消滅している記号が 3,600 を表示する記号と同じ記号であったとすると、5 箇所の記号が合計 10 箇所あることになり、その合計数は 36,000 となる。36,000 は 3,600 の上位単位であって別個の記号で表示されねばならない。それ故に消滅している記号は 3,600 の上位単位 (36,000) の記号でなければならぬ。他方、36,000 を示す記号が 6 箇所であったとすればその合計数は 216,000 となり、これはまた更に上位記号 1 箇所 (216,000) で表示されねばならない。故に消滅の記号は 36,000 のもの 5 箇所であらねばならない。その数の合計は 180,000 となる。この数を碑文に残っている実数に加算すればその合計面積は 198,094 bur 13 $\frac{1}{4}$ iku、平方キロに換算すれば約 1980.94 km² となる。

石柱碑文に記録された約 1980 km² の面積 (東京都=2023 km², そのうち区部は 23 区=569 km²). この区部の面積に匹敵するのがラガシュで、約 550 km²。『人文』の拙稿 p. 41 参照) をもった広い地域には 17 の主要市邑と 8 の主要地区とが含まれている。

シュメール都市国家と「国土」の人口について

Thureau-Dangin は王名は疑問視しつつも、シャルガリ・シャルリが（王位継承によって得ていた）アッカド王国のほかにも、（叙上のごとき）ラガシュのエンシ支配地が何某に与えられたと、欠文のところを補足解釈された。石柱碑文がラガシュ出土のものであり、その残存碑文のうちにラガシュの名や当時の行政文書に出てくる耕地名が見出せるので、1980 km² の土地がラガシュと深い関係のある土地であることはまちがいなからう。ただここで問題となるのは、この広い 1980 km² の地域が全部、初期王朝末期のラガシュの領域であったかどうかという点である。この点について一考してみたい。

後世に編纂され、多分に伝説的要素を含んでいるといわれているアッカド王朝の創立者サルゴンの『年代記』のうちに、「かれ（サルゴン）は宮殿の子達を 5 *bêru* に配置して全国土を支配した」と記されている。*bêru* は double hour または double hour-distance の意を有し、シュメール語の da(n)na にあたる。5 *bêru* は10時間行程距離の意味で、33 miles=52.8 km の距離にあたる。この『年代記』の記事に関してシドニー・スミス (Sidney Smith) 氏は、3代王マニシュトゥス (Maništuš) の一碑文に同王がこれに非常によく似た区劃地をつくった記事を記録しているので、サルゴンの新行政区設置を想わす『年代記』の記事は真実を伝えるものである²⁴⁾と述べておられる。このことは、アッカド王朝時代になって旧都市国家の領土の境界が相当の変化をうけたであろうことを推測させる。このように考えれば、前記石柱碑文の17の主要市邑と8の主要地区を包含する約 1980 km² は、アッカド王朝時代に編成された新行政区の地積であろうと推測することが出来る。この推測を裏付けるのは、アッカド時代のラガシュ出土の行政文書の記事の内容が初期王朝末期のそれと著しく相違した点を有することである。都市国家時代の文書にはラガシュ国内の経済・行政事務が主体的に記録されている。他都市、他地方のことが時に記録されていても、それらはシュメール外世界の都市あるいは地方との通商的経済的関係についてのものである。しかるにアッカド時代の文書には、ラガシュ自体の経済的行政的事務が取り扱われているのは勿論のことであるが、他方ラガシュが中心となって首都アガデ (Agadè^{ki}) やシュメールの他都市との関係事務を記録した文書が多数見出されるのである。次に事例を示せば

「合計 217 箱の魚をアガデに送るためウル・ドゥが受け取った。」(ITT, I, 1083)²⁵⁾

「5 gur-sag-gál の大麦粉をエクが船に積み込んだ。メサグがアガデに運んだ。」(Hackman, 165)²⁶⁾

「合計 11 頭の牛と牛飼ルーガル・ウ、(これらは) 王の牛である (áb-lugal-kam)。クシュ・ダとクシュ・ウとがウルクにつれて行った。」(ITT, I, 1059)

この文書はアッカド国王所有の牛をラガシュからウルクに輸送したことを記録しているのである。またウンマの牧場から王所有の 2394 匹の羊をウルクの牧場に運んだことを記した文書 (ibid., 1047) もある。

「ろばの牧者ザグ・ムとその 2 人の子、商人ドゥガ・ニ、篋作りのルーガル・カはシュルツパークの市民であった (dumu-Šuruppak^{ki}-me)。かれらをラガシュの市民として住まわした ([dumu]-Lagaš^{ki}-me íb-dúru-dúru-né-éš)。」 (ibid., 1363)

「Sagadu の子 Gusilla は Dingirmuda と共に生活し、Dullugalua^{ki} に “住んでいる” (ab-dúru)。Urte の子 Lugalnamdag はヌ・バンダの Inimma と共に生活し、Barsiga^{ki} に “住んでいる” (ab-dúru)。(両人は) Nippur^{ki} の市民であって “Lagaš^{ki} に 住んでいる” (Lagaš^{ki}-a ab-dúru-dúru-né-éš)。かれらを汝に与える。」 (ibid., 1100)

この文書にある Dingirmuda は大書記 (dubsar-mah) であることが同時代の他の文書によって知られる (Hackman, 196, R. 5)。また Dullugalua^{ki}, Barsiga^{ki} がラガシュの領内にある市邑名か村落名であることも、この文書によって明らかである。ITT, I, 1099 には Barsiga^{ki} とならんで Duru₇-i-du-lul^{ki}, Duru₇-ad-da^{ki}, Ki-guru₇^{ki}, Duru₇-šabra^{ki} の地名が見え²⁷⁾、同じく 1096, Ob. 4. 5 には「ラガシュの前方の Nini^{ki} (Nini^{ki} igi Lagaš^{ki})」のような表現も見られる。

初期王朝末期時代の文書にみられる Lagaš^{ki}, Girsu^{ki}, Uru-kù-ga^{ki}, Guabba^{ki}, Kinunir^{ki}, Nina^{ki} (ĒŠ+HA^{ki}) はラガシュ都市国家の地区名であると一般的に解釈されているのである。初期王朝末期のラガシュ文書のうちには見出せず、アッカド時代のラガシュ文書に出てくる上記地名——上記地名のほかに尚お多数のものが摘出される——は、ラガシュに新たに編入された地域内の地区名あるいは市村名であると考えねばならない。このように考察してみると、前述の石柱碑文の約 1980 km² は、アッカド王朝の属州政治の下に編成され、ラガシュのエンシの支配下におかれた新しい、いわばラガシュ州の総面積と推定されるであろう。

因みに、アッカド王朝 5 代王シャルガリ・シャルリ時代のラガシュのエンシ、ルーガル・ウシュムガル (Lugal-ušumgal) の印章銘には「シャルガリ・シャルリ、強き人、アガデ王、ルーガル・ウシュムガル、ラガシュのエンシ、汝の奴僕」²⁸⁾とあり、同王から同エンシに与えた指令書の断片には「ルーガル・ウシュムガルへ (a-na Lugal-ušumgal)」の文字が書かれ、4 箇の印章が捺印されている。上部に「王の愛するもの (ramāi-šarri)」の捺印銘があり、その下に「シャルガリ・シャルリ、強き人、アガデ王」

シュメール都市国家と「国土」の人口について

の王印が押され、その下に「トゥダ・シャルリ、侍従長？(BIL-sahar)」の捺印があり、右上部に「ダダ、宮〔殿〕のシャブラ(šabra)、『……』の子」の印銘が見られる²⁰⁾。アッカド王朝のものものしい官僚制度の一端がこれによって伺える。王の地方長官への命令は、それがさほど重要でない行政事務の場合は、使者(nimgir)が王命の内容を文書にして伝達するのが普通であった。たとえば ITT, I, 1058 に「ギシュバルエ神(殿)の会計掛(šutug) アナク ギとグ・エディンのヌ・バンダ(nu-bānda)のエキ(とに關し)、使者エシュはルーガル・ウシュムガルに申して曰く“クシュダに(かれらを)与えよ”と」とあるのがそれである。ここにみえるルーガル・ウシュムガルは4代王ナラム・シンの晩年には王の書記(dubsar)であり、ラガシュのエンシを兼任していたことがかれの印章銘に——dub-sar/ensí/La[gaški]とあるによって知られる(RTC, 165)。かれは次王シャルガリ・シャルリ時代には専任のラガシュのエンシに昇格していたのである。

上に略述したように、アッカド王朝の官僚的属州政治の下において初期王朝末期の都市国家の領域に変動のあったことが、ラガシュ出土の石柱碑文のエンシ支配領域の面積の広さによって知られるし、またこのことは、アッカド時代のエンシの地位が都市国家時代の独立的なものから従属的なものへと変化していったことを物語るものであろう。このような事情は、更にこの時代の行政・経済文書やマニシュトウス王のオベリスク碑文などの王碑文の記事内容の丹念精密な分析検討によって、より明確化されうるであろうと信ずる。

お わ り に

筆者はファラやラガシュ出土の行政文書や国王碑文の記事を検討して、2500—2100 B. C. 頃のシュメール都市国家の人口を一定の方法を用いて算定してきた。2500 B. C. 頃のシュルッパーク都市国家の自由民人口は約16万人。ウルク、アダブ、ニップール、ラガシュ、シュルッパーク、ウンマの6都市国家間に締結された都市同盟加盟国の自由民人口は約88万人。2100 B. C. 頃のグデアの支配下にあったシュメールの広い地域の自由民人口が約86万人。もしこれらの人口が存在していたとすれば、その裏付けとして、かかる多数の人口を支えうる主食の大麦の生産量があったことを、何をおいてもまず確かめねばならない。ここでは地積単位の1 iku から α gur-sag-gál とれる、したがって耕地面積 A, B, C, D の合計からはいくら収穫があったという風な手順から推算

せずに、王碑文のうちに記録されている数量をそのままに取り上げてその数量と人口数とを比較して勘案することにした。

(4) 節においてとり上げたエンテメナの円筒形碑文の記事を利用する。ウンマのエンシとなったザバラムのサング、イル(II)は、すでに述べたように、後にエンテメナに敵対することになるのであるが、エンシとなってまもない頃の出来事である。かつてウンマに課せられ、しかも不払いとなっていた賠償の一部として「大麦をラガシュに 3600 guru₇ 支払った」(Cone A, Col. IV 11—12) と記されている。guru₄=3600 gur(-sag-gál) である。故に $3600 \text{ guru}_7 = 3600 \times 3600 = 12,960,000 \text{ gur-sag-gál}$ となる。この数量とラガシュの人口との関係を検討してみる。『人文』所載の拙稿のうちに筆者は、M. V. Nikolski, No. 19 文書の 12 家族の構成員を統計的にしらべた。12 家族の所有した男女奴隷数は 11 名(外 2 名は神殿所属の女奴)である。1 家族 1 名の奴隷所有としてウルカギナ王碑文の 36,000 家族に奴隷数を加算すれば、自由民人口 15 万 + 奴隷人口 36,000 = 186,000 人がラガシュ都市国家の総人数となる。いま自由民と奴隷、男女老若の年齢的差別なく 1 人が 1 日に大麦 1 sila (=0.456 升) を食うとすれば、1 年(360 日—太陰暦)には $360 \text{ sila} = 2.5 \text{ gur-sag-gál}$ を消費する計算となる。これにラガシュの総人口を乗ずれば、 $465,000 \text{ gur-sag-gál} = 2,092$ 石が主食として消費されることになる。上述したように、ウンマのエンシがラガシュに支払った大麦の量は $12,960,000 \text{ gur-sag-gál} =$ 約 58,320 石である。この数量は、かりにこれを全部食糧にあてるならば、約 28 年分に相当する量である。筆者が重視したいのは、敗戦国ウンマが支払った大麦の数量そのものではなく、これによって、当時のシュメール地方の農業生産が 10 数万の人口を擁する都市国家群の存在を可能にする充分なる食糧を確保していることが明確化するという点にあるのである。

S. N. Kramer 教授の試算³⁰⁾によると、過去 1 世紀間に中近東の各地域から発掘された、種々の言語を楔形文字で書いた文献資料数は、断片を入れて、50 万箇を下らぬであろう。そのうち 25 万箇以上はシュメール語で書かれており、しかもその 95% は経済的行政的性格をもっている粘土板文書である。ウル第 3 王朝時代のものだけでも神殿や宮殿の行政・経済文書、個人の私文書など 10 万箇を越え、しかもそのうち何らかの形式で学界に紹介出版されたものは 12,000 箇ほどにすぎず、他のものは博物館や個人の所有物として未整理のまま収蔵庫の引き出しのうちに眠っているありさまである。C. J. Gadd によって改版中の『ケンブリッジ古代史』の分冊のうちに取りあげられており³¹⁾、Kramer 教授もまたアッカド帝国以前にシュメール人がはじめて建設した大帝国とし

シュメール都市国家と「国土」の人口について

てその領域と内容とは5年ないし10年のうちに明らかにされるだろうと予想しておられる³²⁾ アダブ (Adab) 国の王 Lugalannimundu の事業の一端を記した資料は、既出土の眠れる楔形文字資料のうちから探し出されたものである。同王は『王朝表』にはただ2行に、アダブの王であり、90年治世したと記してあるのみである。

筆者が『人文』の論文において、また本稿において考察の拠りどころとした資料は、既に出版され、筆者の手もとにある資料集のうちから撰び出されたものである。既刊の資料集、眠れる資料群のうちから、あるいは将来出土されるだろう王碑文とか諸種の文書のうちから、なにかのきっかけで、何人かによって探しあてられる資料によって、筆者の大胆不敵と思われるシュメール都市国家その他シュメールの人口についての所説の問題点が、西欧学界においても論議される日がくるであろう。ソ連では既述のように、ディヤコノフ氏がラガシュの人口を10万人と推算しているのである。

(1963, III, 30)

註

- 1) 『人文』第9集 (1963) 京都大学教養部 (以下『人文』と略記), pp. 1—44.
- 2) 『人文』, pp. 35—44.
- 3) TSS=R. Jestin : Tablettes Sumériennes de Šuruppak, Paris 1937.
- 4) Schul-Texte aus Fara (*Die Inschriften von Fara II*), Leipzig 1923.
- 5) S. N. Kramer : Cultural Anthropology and the Cuneiform Documents, *Ethnology* Vol. I, No. 3, 1962, p. 307.
- 6) 『人文』, p. 42.
- 7) muš と読んだ文字は“倉庫”を意味する guru₇ or gur₇ の文字とよく似ている。1 še guru₇ を“1つの大麦の倉庫”としても意味は通じる。すなわち“大麦倉庫から7シラずつを1人が受取った”というのである。しかしアッカド時代の一文書 (Hackman, 190, R. 5—本書については註26参照) に uru₄-lal še-muš “セ・ムシュの小作”として或る穀物を示している muš の文字が TSS 671 のそれと同じ文字であり、しかも記事の内容も同性質のものであるので, gunu (強める作用の記号) のつけられた muš として še-muš と読んだ。
- 8) A. Deimel : Sumerische Grammatik, 2. Aufl., Roma 1936, S. 128.
- 9) H. Schmökel : Geschichte des Alten Vorderasien, Leiden 1957, S. 53, Anm. 6.
- 10) S. N. Kramer : From the Tablets of Sumer, Colorado 1956 の日本訳, 佐藤輝夫・植田重雄訳 『歴史はスメールに始まる』, 新潮社 p. 59 による。M. A. Beek : Atlas of

- Mesopotamia, Nelson (London and Edinburgh) 1962, p. 51 には“彼はラガシュのエンシ、ナムハニを殺した。彼は月神の神殿のボートを、都市の王ナンナルの命令によって、東の運河までもってきた、云々”との法典序文の訳文がある。
- 11) H. Schmökel : op. cit., S. 35.
- 12) U. M. Dyakonov : Society and State in Ancient Mesopotamia : Sumer, Moskva 1959 の Summary (英文) p. 292, n. 4.
- 13) C. J. Gadd : A Sumerian Reading-Book, Oxford 1924, pp. 64-74 に手写された楔形文字碑文とその翻字翻訳とが載せられている。
- 14) Schmökel : op. cit., S. 57.
- 15) H. Radau : Early Babylonian History, New York 1900, p. 299 に取り上げられている。E. A. F. 134 号文書。
- 16) アッカド王サルゴンの一碑文 H (A. Poebel : Historical Texts, UMPBS=*The University Museum Publications of the Babylonian Section* [University of Pennsylvania], Vol. IV, No. 1, p. 180) に“彼(サルゴン)はウルクと戦い、50名の ensi を Zamama 神の武器で打破った”と記している。
- 17) G. A. Barton : Sumerian Business and Administrative Documents from the Earliest Times to the Dynasty of Agade (UMPBS, Vol. IX, No. 1) の No. 3 文書。
- 18) シュメール・アッカドと呼称され後にバビロニアと称せられた地域を B. Meissner : *Babylonien und Assyrien*, Heidelberg 1925, Bd. I, S. 8 は約 30,000 km² と推算している。M. A. Beek : *Atlas of Mesopotamia*, p. 12 (註 10 参照) は現今の Samarra 以南ペルシア湾までの所謂メソポタミア平原を、長さ 400 マイル幅 125 マイルと計算している。今かりに Meissner の計算 30,000 km² に従うとして、シュメールとアッカドとを半々と見れば 15,000 km² となる。しかし 2000 B. C. 頃にはペルシア湾は現在の海岸線よりもはるかに北方、ウル^{Uruk}の辺まで北入していたと見ねばならない。ウル第 3 王朝のウル・ナンムの法典序文からも知られるように、ウル^{Uruk}の東方運河を経てウル^{Uruk}の船はペルシア湾に通じていたことが知られる。それ故にこの時代のシュメールの地の面積をめの子算で六凡 10,000 km² 前後と計算すれば、人口密度は 1 km² あたり 100 人の割合となる。
- 19) *Die Sumerischen und Akkadischen Königsinschriften*, Leipzig 1907, SS. 34, 35.
- 20) *Corpus des Inscriptions “Royales” Présargoniques de Lagaš*, Genève 1956, p. 39. ENT. 32, Vase B.
- 21) Dyakonov : op. cit., p. 292, n. 4.
- 22) Dyakonov : op. cit., p. 292.
- 23) Thureau-Dangin : op. cit., SS. 170, 171, Stele (Tello).

あ と が き

- 24) S. Smith : Early History of Assyria, London 1928, p. 93.
- 25) ITT, I =Thureau-Dangin : Inventaire des Tablettes de Tello, Tome I, Textes de l'époque d'Agadé, Paris 1910.
- 26) Hackman=G. G. Hackman : Sumerian and Akkadian Administrative Texts, New Haven (Yale Univ. Press) 1958. 数字は手写作文書の番号。
- 27) duru₇にはアッカド語の *kapru* “村落”の意味がある。É-A と2字で書かれている。Duru₇-šabra^{ki}は “šabraの村の地”の意。šabraは職名で、アッカド時代からウル第3王朝時代には宮殿や神殿の重職で ensíやsanguの代理を務め、主として経済・行政部門の事務の責任者となっている。おそらくこれは “šabraの荘園の地”, “šabraの所領地”の意とも解される。duru₇-šabra^{ki}に対応する duru₇-ensí-ka^{ki} “エンシの荘園の地”なる表現も見られる(ITT, I, 1182, R. 4)。“都市周辺の地”を意味する uru-bar-raもアッカド語で *kap-ru* “村”と訳されている。uru-bar-raは都会に対する田舎の一般の名称のように考えられる。
- 28) Thureau-Dangin : Recueil de Tablettes Chaldéennes, Paris 1903, p. 162. 以下 RTC と略記。
- 29) RTC, p. 161.
- 30) S. N. Kramer : Cultural Anthropology and Cuneiform Documents, *Ethnology* Vol. I, No. 3, 1962, pp. 301-2.
- 31) C. J. Gadd : The Cities of Babylonia, *Cambridge Ancient History* Vol. I, Chap. XIII, Cambridge 1962, p.24.
- 32) C. H. Kraeling and R.M. Adams : City Invincible, Chicago 1960, pp. 183-4.
- (本研究は、昭和37年度文部省科学研究費による研究の一部であることを附記する)

あ と が き

○本号は副会長であった中原与茂九郎教授の退官記念号。杉勇教授も高諾されシュメール・アッシリア学特集を企画してきたが同教授の玉稿が頂けず、伊藤氏にいそぎ執筆を煩わした。幸い東都学界からは板倉勝正教授の玉稿をえて巻頭を飾りえたのは望外の光栄、また中原教授には進んで論稿を寄せられ、ほか諸氏の高論卓説、いずれも本邦古代オリエント学の精華ならぬはなく、また「古代オリエント研究特集」と銘打つ本格的な編集も本誌をもって本邦最初のものとして自負したい。○彙報欄記載の如く中原教授からは多額の基金が寄せられた。感謝の意は本誌の充実にもこめて一路前進したい。“路は一つ——真実のそれであり、ほかのはみな路でない。”(ヤスナ 72₁₁) その真実一路とは学術誌としての本誌の内容充実であるともわれらは言いたい。本号は行掛かり上従来のスタッフで事に当たったが、こんど副会長に織田武雄教授、編集長に羽田明教授を迎え、足利会長以下陣容一段と強化、躍進の気みなぎる本会である。○しかし本誌も活版印刷となってから前号まですでに4号、毎号足利会長から容易ならぬ助成を仰いできた。会員倍加を要請する編集部之苦衷と賢察の上今後ともよろしく願いたい。○本号も印刷はあばろん社社主伊藤武夫氏を煩わしたが、面倒な活字の新鑄にも協力され感謝にたえない。

[編集部記]